

## 《報告》

「毎日新聞・埼玉大学共同寄付型世論調査」

毎日新聞社世論調査室長 三岡 昭博



○司会（松本） それでは、引き続いて毎日新聞の三岡さんにご報告をお願いします。

三岡さんのほうには、実は寄附型世論調査とあって、これは私がアイデアをあたためていたものなんですけれども、毎日新聞さんのほうにご提案をしたら快く取り上げてくれて、昨年11月、我々と毎日新聞さんと一緒にということで共同の全国世論調査に取り組んで、それなりの好成績を上げました。ありがたいことに1回限りではなくて今後も引き続き一緒に年1回こういう調査をやっていくという枠組みができました。そのご報告を三岡さんをお願いします。

よろしくをお願いします。

○三岡 ご紹介いただきました、毎日新聞の三岡でございます。

まずは、埼玉大学の社会調査研究センター設立並びに4月から本格運用ということだと思えますけれども、まことにおめでとうございます。今松田さんの報告をお聞きしまして、本当にすごいものができるんだなというふうに思いまして、今後いろいろご相談させていただければと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

このセンターは設立が昨年10月ということでして、恐らく我々との共同調査というのが1番目か、2番目ぐらいのこのセンターとしての仕事だったのではないかなと思います。調査自体は自治問題に関する調査なんですけれども、松本先生からお話ございましたけれども、その調査に社会に対する寄附というのをセットといたしますか、ドッキングするというふうな新しい手法で、実験的にやってみました。去年の11月と12月にかけてということでございます。きょうは、その結果とこの調査の意義というものについて簡単にご報告させていただければと思います。

まず、調査の概要を簡単に説明申し上げますと、タイトルをですね、これは松本先生のご提案で「日本の世論2013」と大きく構えてみました。

調査自体は、暮らしとか外交・安保、憲法、エネルギー、天皇制など、幅広に28問を設定しまして、その他女性に関する質問が10問で、全部で38問というつ

くりで実施しました。

2,400 人を選挙人名簿から無作為に抽出し、郵送方式で実施したということでございます。

回収率は62%ということですので、松田さんの先ほどのお話からしますとまだまだ改善というか、改革の余地があるなという結果でありました。

簡単にこの寄附のスキームをご説明申し上げますと、真ん中に毎日新聞社とありまして、調査に回答してくれた方、それと右のほうに社会的な事業を行っている団体、今回はあしなが育英会などなんですけれども、まず毎日新聞のほうから調査に回答してくださった方に謝礼を送るとというのが一般的な郵送調査あるいは面接調査のやり方でありまして、ここを点線にしたのは、謝礼を送ったことにすることとあります。そして、回答してくださった方から社会事業を行っている団体、あしなが育英会などに寄附していただくということとあります。

実際はこういう物とかお金のやりとりはないわけでありまして、回答者の同意を得た上で我々新聞社のほうからあしなが育英会などに最終的に寄附をしたということとあります。実際にそれをしましたよということを証明するために、新聞社のほうから回答くださった方に報告書をお送りしました。さらに、あしなが育英会などからお礼状というのを一緒にこの回答者に送りました。礼状は一旦毎日新聞が預かって報告書と一緒に回答してくださった方に送りまして、さらに調査の結果新聞に掲載したものをコピーして一緒にお届けしたと。こんな方法で実施いたしました。

それで、なぜ寄附型なのかということとありますけれども、これは提案いただいた松本先生から毎日新聞に寄せていただいたコメントなんですけれども、これを紹介してなぜ寄附なのかということにかえさせていただきたいと思えます。

最初からいきますと、日本の世論調査は新聞社の社会的信用を基盤に定着してきた。ところが、このところ回収率が落ち、調査の劣化が言われるようになっていくという問題提起です。

寄附付きの世論調査は、社会に対するアピールの仕方というか、世論調査のパラダイム転換への試みであるということをおっしゃっています。今新聞社は、調査になかなか答えてもらえない中で、面接や郵送調査に謝礼をつけて回収率を上げる努力を盛んにしている。世論調査が対価を伴うものになっているんだと。メディアが自分で世論調査をお邪魔でしょうかと自虐的に想定して、かえって墓穴を掘ってい

るところがあるのではないかという問題提起をされていて、確かに世論調査は歓迎されないかもしれない。しかしながら、世論調査の対象者として選ばれた人は社会や政治に対する発言権を得たとも言えると。世論調査に答えるとはそういうものだという認識を広められないかと思う。

この寄附つき、寄附型と先生はおっしゃっていますけれども、寄附型世論調査は、回答の対価としての謝礼を社会に寄附してもらおうというものであると。その使い道を回答者みずからに選んでもらうということで、自分の発言や回答の社会的な意味を確認してもらおうという狙いもあるということをごコメントしてくださいまして、まさにこれに尽きるんじゃないかなと思います。

釈迦に説法ですけれども、世論調査といいますのは民主主義を支える非常に重要な機能でありまして、また世論調査がきちんとできるということはその国の民主主義のバロメータであるということも言えるんだと思います。にもかかわらず、最近非常に調査の環境が厳しくなっているということでありまして、世論調査に答えるということはある意味では社会に貢献することであるということをご、こういう寄附型という取り組みを通じまして、大河の一滴かもしれませぬけれども、少しずつ広めていけたらなということがこの寄附型世論調査の狙いだったというふうに思います。

これは調査票の一番最後のページにつけた、どういう事業に寄附してもらおうかというものなんですけれども、皆さんのお手元に青い「政策と調査」というのがあると思いますけれども、これの122ページにもうちょっと大きなものがございます。今回の対象という形で寄附先をどうしようかといういろいろ考えたんですけれども、余り広げるよりは特定のものに絞ったほうがいいのではなかろうかということで、あしなが育英会に絞って実施してみました。育英会にもいろいろ事業がありまして、この1から4までに分類して、好きなものを選んでくださいというふうなことにしました。

ただ、中にはこのあしなが育英会は嫌だという人がいる可能性がありますので、毎日新聞社が実施しております毎日希望奨学金というところも1つつけ加えまして、この5つの中からお選びくださいという形で実施いたしました。

これが寄附を選んでいただいた結果でございます。2,400人のうち1,548人がこれを選んでくださいました。この中には、実際には本人ではなくて代理回答したとい

うふうに思われるものも、とりあえずこの際せつかく答えていただいたので寄附に加えようということで、実際の回答者よりは寄附先の内訳の人数は多くなっております。あしなが育英会の事業を選んだ人が66%、毎日希望奨学金を選んだ人が34%ということで、その内訳が表示してあります。

さらに、実際にちゃんと寄附したかという報告書の送付を希望するか、しないかということもあわせて聞きましたところ、報告書を送ってほしいという人が22%で、送らなくてもいいという人が78%でありました。希望する人の22%が多いかどうかは何ともわからないんですけれども、大多数の人が報告書を送らなくていいよということでありました。

調査に回答してくださった方のコメントを最後に紹介して報告を終わりにしたいと思うんですけれども、この調査全般についてはかなりいろんな書き込みをしてくださった方がいるんですが、幾つか挙げてみますと、今回の調査に答えて、「自分がどれだけ世間を知らないかがわかった。これを機に少しでも世の中の情勢に関心が持てたらと思う」と、20代の男性であります。「誠実に真摯な気持ちで記入いたしました。よりよい日本、社会になることを願いながら」という70代の女性。その一方で、「詐欺が多い中、この調査もその1つなのかなと思いつつ回答した。何事もないことを願いたい」という方もいらっしゃいました。

寄附そのものについてでありますけれども、「おもしろいアイデアだと思います」という意見とか「寄附に関心があっても行動に移せない人にはすばらしい方法だと思います」、30代女性。「寄附がついているのは、とてもよいと思いました。より回答しようという気持ちになると思います」と、40代女性。

その反面、寄附というのは自発的にするものであると思うと。「強制されてたくはありません」、70代女性。「私自身、施設で育ちましたので、遺児の方々には幸せになっていただきたいですが、この寄付金の集め方には同意しがたいです」と20代の女性。こういうご意見もありました。

昨年の秋から冬にかけてまして実験的にこういう試みをしてみたんですけれども、これは1回だけで終わってはどうにもならないと思いますので、とりあえず10年やってみて、この62%という回収率がさらに7割、できれば8割というところまで持っていければなと思います。

新しい試みというのは非常にわくわくするものでして、松本先生あるいは松本ゼ

ミの皆さんにご協力いただいてこういう試みをやってみたというのは非常によい経験になりましたので、さらにこれを大河の一滴から川ぐらいまでに広げられるように今後とも精進していきたいと思っておりますので、松本先生、これからもよろしくお願いいたします。

とりあえずこれで報告を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 どうもありがとうございました。